

研究課題	秋冬期における一、二年生草花の展示栽培（マトリカリア）
背景・ねらい	新潟市では晩秋から早春にかけて出荷できる切花品目が少ないため、秋冬期における無加温ハウスで栽培が可能な品目・作型等を検討し、切花出荷期の拡大を図る。
担当者	山口 次郎, 渡辺 智之, 船木 武人, 渡邊 一彦
研究期間	2020～（1年目）

1 目的

秋冬期に無加温ハウスで栽培が可能であり、市場での需要が高い品目を展示栽培し、当該期に球根以外で種苗費が安く換金可能な草花類（秋播き二年草）の新品目導入のための資料とすることを目的とする。

2 方法

(1) 供試品目：マトリカリア（5品種、図1）

アマゾン（黄八重）、カミール（白一重） <ミヨシ>
 バヤ（白八重） <フッカエン>
 パルセニュームシリーズ：シングルスノー（白一重）、
 クラウンホワイト Imp（白八重） <ムラカミシード>

(2) 試験区の構成・規模

各品種各 20 株（10 株×2 反復）

(3) 耕種概要

- ア 試験圃場：鉄骨ハウス 4
- イ 播種：7 月 17 日
- ウ 定植：8 月 14 日
- エ 栽植様式：畝幅 80 cm, 条間 30 cm, 株間 40 cm, 2 条植え（摘芯）
- オ 施肥：基肥（kg/10 a）N-P₂O₅-K₂O= 10-10-10
追肥 生育の状況を見ながら適宜施用。
- カ 電照：定植直後より日長延長（日没後～PM10:00）
- キ 保温：11 月上旬から保温開始（二重カーテンにて）
- ク 摘芯：抽苔開始を確認して、適宜摘芯。

(4) 調査項目

採花日、採花本数、切花長、茎径、節数、側枝数、花径、切花重
 ※年内採花を想定しているため、12 月 21 日で調査終了

3 結果の概要（図 2）

- (1) 全ての品種で発芽は良好で、定植後の生育も大きな問題はなかった。
- (2) カミールとバヤの開花が最も早く 11 月 16 日から採花開始をしたが、平均採花日はそれぞれ 12 月 17 日と 12 月 19 日となり、株によって開花時期が大きくバラついた。逆にアマゾンは 11 月 30 日採花開始で平均採花日が 12 月 3 日となり、開花時期がまとまっていた。年内の採花終了を想定していたが、全品種で調査終了日の 12 月 21 日までに採花を完了することはできず、特にクラウンホワイトは調査終了時点でほとんど採花できなかった。調査終了時、蕾の確認できた花芽分化株率を見ると、クラウンホワイトは 65%と低く、他品種は 85%以上と高い値となった。
- (3) 形質はいずれの品種も 90 cm 以上の切花長となり、ボリュームも問題ないものが採花できた。調査終了時点での一株当たりの採花本数はアマゾンとシングルスノーが 2.6 本程度、カミールとバヤが 1.3 本程度であったが、出蕾しているものの未開花の枝が多くあり、調査終了後に開花が確認された。
 また、保温のためにハウスを締め切るようになると灰色カビ病が発生し、特に一重の品種（カミール、シングルスノー）で顕著にみられた。

4 まとめ

本試験では、本来秋播きで春咲きのマトリカリアを夏播き秋冬咲きの作型で栽培した。厳暑期の播種・定植栽培であるため、育苗時の遮光、定植後のミスト散布などの処理を行った。

カミール、シングルスノーについてはハウス保温時に灰色カビ病が多くみられたため、本作型での栽培には不向きであると考えられる。

また、クラウンホワイトは無加温では年内採花が難しく、他品種でも採花残りがあったため、播種・定植時期を早めることでより採花率を上げることができると考えられる。

植栽は本試験程度が妥当と思われる。



図1 品種別花写真 (①アマゾン, ②カミール, ③バヤ, ④シングルスノー, ⑤クラウンホワイト)

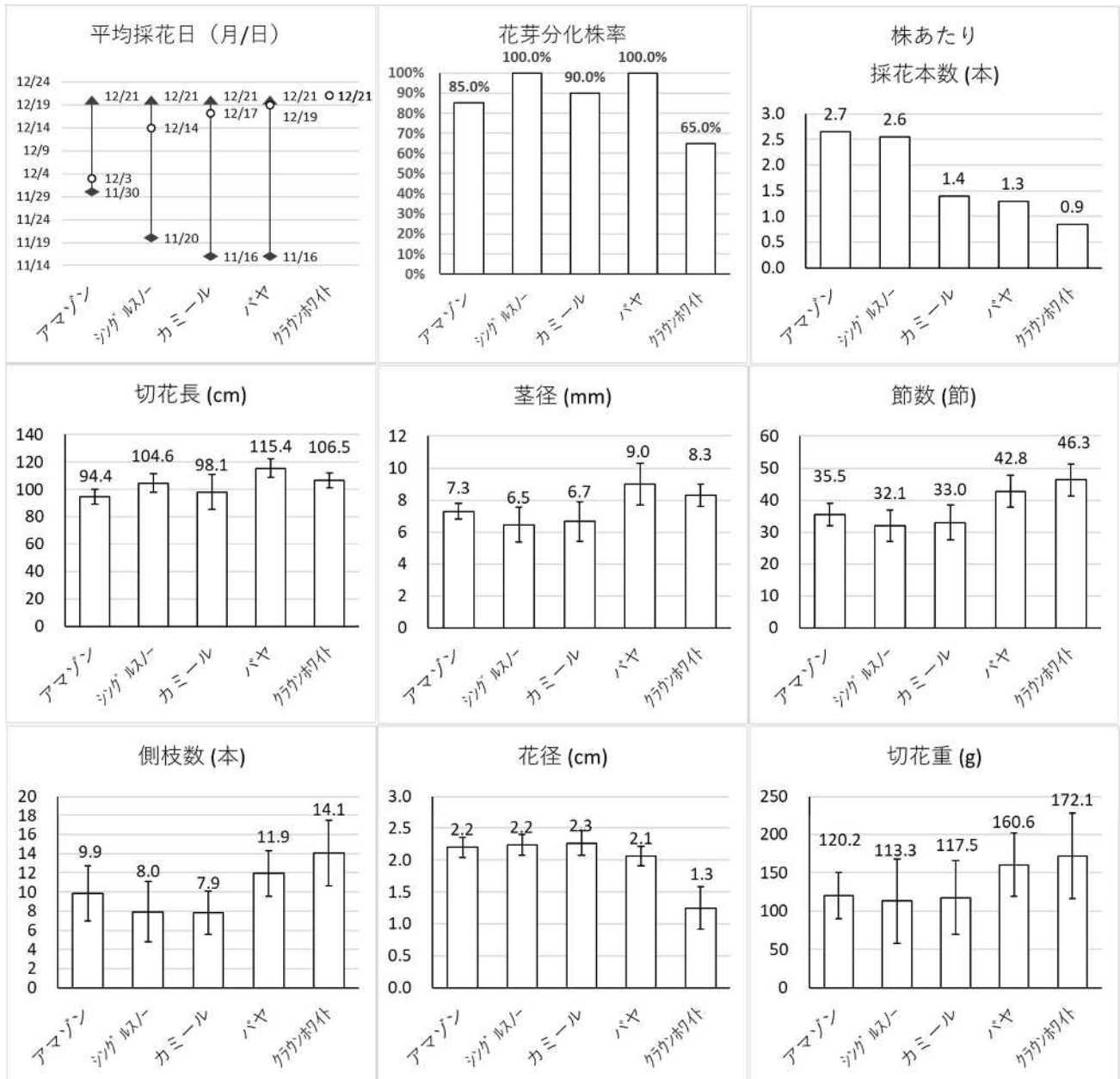


図2 マトリカリア切花結果 (切花長, 莖径, 節数, 側枝数, 花径, 切花重 : n = 10)